

## 『詩聖堂百絶』注釈

山口 旬

本稿は、大窪詩佛の第一詩集『詩聖堂百絶』（寛政十二年刊行）の注釈を試みたものである。その出版事情は跋文に簡単に記されているように、第一詩集『卜居集』（寛政五年刊）の刊行後のいくつかの詩集から、奥田在邦・下村定方が、七言絶句を抄出したものという。

百絶という、七言絶句百首を集めた形式は、江戸後期の七言絶句の流行によって数多く出版されたが、同じ江湖詩社の師匠格である市河寛齋の『寛齋百絶』（寛政九年刊）について、早い時期のものである。親しみやすい詩集であるのは勿論、手軽な実作の手本という性質も兼ねている。また、作者から言えば、自身の詩論の実践を示す意味もあった。

この前年に、詩佛は『詩聖堂詩話』（寛政十一年刊）で、江湖詩社や自身が推進する清新性靈派の詩人・作品・理論などを紹介したが、『詩聖堂百絶』はその自身の作品による実践編とも言える性質を持っている。『詩話』が『百絶』の解説になっていたりと、両者を併せ読むことで、より深い理解ができる部分もある。

『詩聖堂百絶』出版から、詩佛はアンソロジーや詩の参考書などの著作に追われたためか、第三詩集の『詩聖堂詩集初編』が出るの

は十年後の文化七年になる。本書は、詩佛の初期の詩風を知るのに貴重な書となっている。

巻頭に「奥田在邦士達・下村定方義脚 輯校」とある。奥田在邦士達は、『采風集』巻三に「字は士達、義堂と号す。宮津侯の医官」とあり、跋文の筆者でもあり実質的な編者であろう。下村定方義脚は未詳の人物であるが、或いは資金援助者かという（大窪詩仏年譜稿）。（注一）

〔凡例〕

本稿の底本は、国会図書館所蔵本とした。底本には後の書き入れや汚れ等で判読しづらい部分もあるので、後に『寛齋百絶』、細庵百絶』と合冊された『三大家百絶』（国文学研究資料館所蔵本）中の『詩聖堂百絶』も参照した。

詩には便宜的に通し番号をふった。

詩は、白文・書き下し文・訳文を示し、語の解釈はできるだけ訳文中に含めるようにした。訳文だけではわかりにくい語注や典拠はで示し、複数の詩や全体に関わるような説明は で示したが、か

ならずしも厳密ではない。

詩題・序・自注などの詩以外の散文部分の書き下し文は（ ）で示した。

書き下し文は、原本の訓点を生かしながら、私に訓読した。

ルビは全体を通じて難読と思われる部分に便宜的に現代仮名遣いで付した。

1 曉過高輪（曉に高輪を過ぐ）

潮聲風冷喚眠醒 潮声 風 冷にして 眠を喚び醒す

半掲轆簾過緑汀 半ば轆簾を掲て 緑汀を過ぐ

海面漸明天欲曙 海面 漸く明かにして 天 曙げんと欲す

散歸漁火伴殘星 散じ帰る漁火 殘星に伴ふ

波の音が聞こえ、風は冷たく、駕籠の中の私の眠りを覚ます。

半分ほど簾を上げ、緑色の水際を通り過ぎながら外を見る。

海面はだんだんと明るくなり、空に日も昇ろうとしている。

ばらばらに帰ってくる漁船の灯が、まだ残っている星といっしょに輝いている。

潮聲 当時の高輪は海岸線に近く海の景で知られていた。『江戸名

所図絵』高輪大木戸の項に、「後には、三田の丘綿々とし、前には、

品川の高遙かに開け、渚に寄する浦浪の真砂を洗ふ光景など、いと興あり。」とある。

高輪は、詩佛が住んでいた品川に接する地である。寛政五年、『卜居集』「歳暮」の注に「予、時に品川に在り」とあり、直後の詩に「高輪作」の詩がある。「年譜稿」によると、「寛政三年頃、品川既醉亭にすむ」とある。「既醉亭」は『奥蘭稿甲集』中野子興「題大窪天民既醉亭」に見える。

2 看梅歸途遇雨（梅を看て帰途、雨に遇ふ）

一枝折取成歸伴 一枝 折り取りて 帰伴と成す

攜出村莊日已斜 携へて 村莊を出れば 日 已に斜なり

輕籠乍舖昏作雨 輕籠 乍ち舖て 昏に雨と作る

好將微濕健梅花 好し 微湿を將て 梅花を健にせん

梅見の帰りに、一枝を折って、道連れとした。

枝を持って、村の家を出れば、もう日も傾いている。

薄い籠が忽ち一面を掩って、日暮れて雨となった。

よし、このお湿りで梅花を萎れさせずに行くとしよう。

健梅花 楊誠齋「春寒絶句」に「半點輕寒健牡丹（半点の輕寒、

牡丹を健にす）」の句があり、後に詩佛と菊池五山編の『広三大家絶句』にも載せている。

3 東叡山看花三首（東叡山に花を看る。三首）

一池春水緑生烟 一池の春水 緑 烟を生ず

多少山櫻静欲眠 多少の山桜 静にして 眠らんと欲す

漠漠濃陰未成雨 漠漠たる濃陰 未だ雨と成らず

慈雲閣畔養花天 慈雲閣畔 養花の天

池いっぱいには漲る春の水、緑の水草から霧が生じるかのようで、多くの山桜は、静かに眠ってしまっただ。

雲はどんよりと立ち籠めるが、まだ雨にはならない。

慈悲心のある雲の名前のとおり、慈雲閣のほとりで、雲が花を潤おす花曇りの空模様だ。

東叡山 上野、東叡山寛永寺。 一池 不忍池。 養花天

花曇り。

慈雲閣という名から発想した詩である。慈雲閣は寛永寺内に実在したのかも知れない。しかし、後に詩佛『詩聖堂詩集二編』に「題慈雲閣（慈雲閣に題す）」という詩があり、自注に「閣は桐生西山に在り。上毛下毛の山、歴史として数ふべし。予、十餘年前、曾て来り遊ぶと云ふ。」とあり、この詩は文化十年の作であるので、その十餘年前と言えはちょうど『詩聖堂百絶』刊行とされる寛政十二年ころになる。この桐生の慈雲閣の名だけを利用した作とも考えられる。

4 (2)

山後山前一尋 山後山前 一一 尋ぬ

不知身已在深林 知らず 身は已に深林に在ることを

青鞋故避落紅歩 青鞋 故に落紅を避て歩す

亦是閑人持戒心 亦た是れ 閑人 持戒の心

上野の山の北に南にと、一つ一つ桜花を探っていくと、いつの間にか、深い林の奥まで来てしまっていた。

落ちた紅の花びらを草鞋で踏まないように注意して歩く。

これは風流人の心得、自戒すべきことなのだ。

山後山前 『訳注聯珠詩格』 盧玉川「山中」に「偶従山後到山前

（偶たま山後より山前に到る）」の表現がある。 不知 范成大

「入崇寧界（崇寧界に入る）」に「不知身已在彭州」の句がある。

類似の表現が見られる点で習作的な作品と言えるが、古人の表現をそのまま同じように用いるのではなく、必ず工夫を加えている。

5 (3)

春寧 蘭珊らんさんとして 渾すべて休せんと欲す

偶催詩伴且閑遊 偶なま詩伴に催されて 且く閑遊す

近來無復簪花興 近來 復た花を簪するの興無し

誤被落紅飛上頭 誤て落紅の飛んで頭に上らる

春の風景も盛りを過ぎて、全て終わろうとしている。

そんな中、偶然に詩の仲間誘われて、しばらく散歩する。

近頃はもう花を簪にして興するなどということもなくなったが、落ちてくる花の方から誤って頭に乗っかってきた。

蘇東坡「吉祥寺賞牡丹」の「人老簪花不自羞、花應羞上老人頭（人は老て花を簪して自らは羞ぢず、花は應に老人の頭に上るを羞つべし）」などの詩のように花を簪するのは年少の者の行為である。

6 初雪二首

聴取歎聲隣曲遍 聴取す 歎声の隣曲に遍きを  
誰家開宴引親知 誰が家が 宴を開て 親知を引く  
曉来吾亦侵寒起 曉来 吾も亦た 寒を侵して起き  
呵筆先書送雪詩 筆を呵して 先づ書す 雪を送るの詩

初雪を見ての歎声がまわり中から聞こえるのを聴いている。どの家で、親しい友人を呼んで、雪見の宴を開いているのだろう。明け方から私も、寒いのに起き出して、凍りついた筆を暖め、まず雪を見送る詩から書いたことだ。

雪で喜んでいる人もいるが、自分のような寒居では雪には去ってほしい、の意か。

7 (2)

墻陰池畔總無私 墻陰 池畔 総て私無し

亜柳堆梅一樣奇 柳に亜し 梅に堆して 一樣に奇なり  
只是關心後園竹 只だ是れ 心に關るは 後園の竹  
新梢未慣解支持 新梢 未だ慣れず 解く支持するに  
垣の陰であろうと、池のほとりであろうと、雪は公平に降る。柳にくっつき、梅につもって、どこも面白い景色だ。ただ気にかかるのは、裏庭の竹だ。  
出たばかりの梢は、まだ雪に慣れず、しっかり支えることができないだろうから。

8 熊谷堤上作

長堤十里雨新晴 長堤十里 雨 新に晴る  
滿路深泥不易行 滿路の深泥 行き易からず  
萬頃秧田綠將没 万頃の秧田 緑 將に没せんとす  
夕陽多處水縱橫 夕陽 多き処 水 縱横  
十里続く長い川堤を行くと、雨も上がりや々と晴れてきた。道は泥だらけで、歩きづらくなっている。  
広く広がる田植えの終わった田では、水があふれ苗が没するようつで、夕陽が何処までも続く水面に照り映えている。

熊谷堤 熊谷は埼玉県熊谷市。 中山道の宿駅。 荒川北岸に沿い、  
江戸初期、熊谷堤が築かれた。

9 初夏國中即事三首

紫盡紅消綠未勻 紫 尽き 紅 消じて 綠 未だ勻まはず

閑園袖手立斜曛 閑園 手を袖にして 斜曛に立つ

閨年不覺黃楊退 閨年 覚えす 黃楊の退くを

只有詩思減幾分 只だ詩思の幾分を減する有り

春の紫や紅の花々もすっかり消えてしまったが、新緑はいまだに伸びきらない。 ひっそりとした庭で懷手して夕日の中、立っている。

禪家では、閨年には黃楊が成長せず逆に縮小するというのが、特にそうは感じない。 ただ、四月が二度有るといくらか詩心が失せるといふことはある。

黃楊退 禪の語で、黃楊木禪といい、黃楊はもともと成長が遅いが、閨年がかえって縮小するという。 純漢の參禪に例える。

閨年は、寛政十二年と見られ、閨四月があった。 楊誠齋「九日菊未花」に「舊說黃楊厄閨年（舊と説く、黃楊、閨年に厄すと）」とある（厄は伸びるのを阻まれる意）。 結句は、季節がずれること、また四月が二度あるところから、間延びして詩思が減じるということのである。

10 (2)

新竹離離欲動風 新竹 離離として 風に動かんと欲す

三春春事總歸空 三春の春事 総て空に歸す

杜鵑似恨花過去 杜鵑 花の過ぎ去るを恨むるに似て

啼血染成紅幾叢 啼血 染め成す 紅 幾叢

新しい今年の竹もよく茂って、風に揺られている。

三月も味わった春の趣きも全てなくなつた。

ホトトギスは花の消えていくのを恨むように、

血を吐くまで鳴いて、いくむれかの花を赤く染めた。

「紅」は次の第三首に「薔薇」とあるのを指す。

11 (3)

簾影參差日欲斜 簾影 參差として 日 斜ならんと欲す

學飛燕子傍檐牙 飛ぶを学ぶ燕子 檐牙に傍ふ

東君不敢収春去 東君 敢て春を収め去らず

猶剩薔薇一架花 猶ほ剩す 薔薇 一架の花

簾からふぞろいに夕日が射し、日も暮れようとしている。

飛ぶのを練習している燕の雛も、軒の際に寄り添っている。

春の神様も完全に春を終わらせたわけではなく、

まだ、一柵の薔薇の花を残してくれている。

薔薇一架 唐・高駢「山亭夏日」に「一架薔薇滿院香」(一架の薔薇、滿院香はし)の句がある。

12 觀暑五首(暑を觀る 五首)

為消暑倦出茅茨 暑倦を消暑するが為に 茅茨を出つ

便是閑人無事時 便ち是れ 閑人 無事の時

自笑機心未灰盡 自ら笑ふ 機心の未だ灰し尽きざるを

却過竹院又觀棋 却て竹院に過て 又 棋を觀る

昼間の退屈しのぎに粗末な家を出た。

まさにこれは閑人の何事もなすことのないときのことだ。

自分で笑ってしまうのは、そのような閑人の閑事であるはずなのに、

世俗的な欲心が消え去っていないことだ。

閑を求めていった竹院で逆に、また酷暑の勝負を見物してしまった。

却過竹院 唐・李涉「題鶴林寺」に「因過竹院逢僧話、又得浮生

半日閑。(竹院を過て僧に逢て話すに因て、又た得たり、浮生半日の

閑。)とある。却は、李涉は閑を得たが自分は逆に、の意。

このような古人の詩句の逆用は古人の詩の転用の仕方として、詩佛のよく用いる方法である。

13 (2)

檐影微微日欲晡 檐影 微微として 日 晡ひらならんと欲す

竹爐香爐點烟無 竹炉 香爐じゆして 点烟 無し  
年来我亦詩妨業 年来 我も亦た 詩 業を妨ぐ  
不笑閑窓木野狐 笑はず 閑窓の木野狐

軒の日射しが微かになってきて、そろそろ夕方になるうとしていて。いつのまにか竹の爐の香も燃え尽きて、わずかの煙も立たなくなつた。

ここ数年来、私もまた、詩に夢中になって、仕事の妨げになっている。こうして閑かな部屋で、人を夢中にさせるといふ暑を指すことを笑うことはできない。

晡 申の刻。午後四時頃。夕方。 木野狐 暮盤。人を惑わす為

詩が業を妨げると言っており、この詩の時点で、詩佛は独立した詩人としての意識はまだ完全ではなかったのかもしれない。家業は医者であり、77番詩に見るように、薬草の栽培などもいくらかはしていた。

14 (3)

一着相持下子遲 一着 相持して 子を下すこと遅し  
有條生路不曾知 條の生路有れども 曾て知らず  
世間多少當塗者 世間 多少 塗に當る者  
何異枯枰爭勝時 何ぞ異らん 枯枰こへい勝を争ふ時に

一手指すのに、石を手に持って石を下すのが遅い。石を活かす目があるのだが、全く気づきもしない。世間にはたくさん、重要な地位の権力者がいるが、活かすことを活かせない。

古ばけた碁盤上の勝負と何が違うというのだろうか。

條 碁盤の罫線。

當塗 當塗、当路ともいう。みちにあたる。

重要な地位に在ること。

15 (4)

燈數添花手自挑 灯 數は 花を添て 手 自ら挑ぐ

不知更漏下殘宵 知らず 更漏の殘宵に下るを

人間勝敗君休議 人間の勝敗 君 議することを休めよ

一局分明幾六朝 一局 分明に幾六朝

燈心の燃えかすが何回も花のようになり、手すから芯を上に出す。

水時計が垂れて、夜の更けていくのも気づかない。

世間での勝敗など問題にする必要はない。

困碁一局の中にはつきりと何度も王朝が入れ替わるのを見たのだから。

爛柯の故事（晋の王質は仙人の碁を打つを見て、斧の柄が腐る

まで時のたつのを知らなかったという）を背景にしている。

16 (5)

驅騰聲聞思似絲 驅騰ひくま聲聞 思 糸に似たり

一場殘局欲終時 一場の殘局 終らんと欲する時

栗田海水須臾改 栗田 海水 須臾に改る

万劫猶知有盡期 万劫 猶ほ知る 尽る期有るを

石を打つ音の中、思いは千々に乱れる。

一局のさしかけの碁が終わるうとする時。

桑畑と海があつというまに入れ変わってしまった。

万劫という長い時間もやはり終わることがあるのだ。

栗田海水 桑滄之變の故事。「栗田、變じて海と成る。」世の中の

移り変わりのほげしいこと。この故事は96番詩にも使われる。

劫 仏語できわめて長い時間。困碁の劫（コウ）の縁語。

以上の五首は時間的経過に沿った連作的構造をなしている。

17 紅葉為高聖誕（紅葉 高聖誕の爲に。）

青出於藍無可怪 青は藍より出づ 怪しむべき無し

黃生自土亦何工 黃は土より生ず 亦た何ぞ工ならん

不如將此秋霜白 如かず 此の秋霜の白きを將て

染作山山一樣紅 染て山山一樣の紅と作さんには

青は藍より出るといふが、不思議なことではなく、

黄色は土から生まれるというのも、またどつして巧妙といえようか。この秋の真つ白いはずの霜が、山々を一面に紅に染めるのには及ばないのだ。

青出於藍 出藍之誉の故事。 黄生自土 黄色は五行で土の色。  
高聖誕 高梨聖誕。 信州中野の漢詩人。 号は紅葉。 一七七四—  
八三三。

柏木如亭が信州中野で開いた晚晴吟社の中心詩人であった高梨聖誕の号である「紅葉」を詠んだ。聖誕が紅葉と号した時に贈った詩か。

18 四月

氣候清和四月天 氣候 清和 四月の天  
秧針抽翠似鋪胃 秧針 翠を抽でて 毳を鋪くに似たり  
今年又是豐年兆 今年 又是 是れ 豐年の兆  
上店松魚不抵錢 店に上る松魚 錢に抵らず

氣候は静かで平和な四月の空。

苗の芽は青々と伸びてきて、毛氈を敷くようだ。

今年、またこれは豊年の兆が見える。

店に出る初經に金を惜しむことはない。

松魚 鱈。 かつお。 柏木如亭『詩本草』十九話に「その松魚に作

る者は此の方俗間の文字なり」と考証がある。

19 山本汎居緑陰茶寮庭前有紅梅一樹比已結實葉間更發西三點白

花（山本汎居が緑陰茶寮の庭前に紅梅一樹有り。已に実を結ぶ比るほひ、葉間、更に西三點の白花を発く。）

號國夫人玉作肌 號國夫人 玉を肌と作す

誤隨時世競妍媸 誤て時世に隨て 妍媸を競ふ

又猜新様不相稱 又猜ふ 新様の相稱はざるを

偷卸紅粧試舊姿 偷に紅粧を卸して 旧姿を試む

山本汎居の緑陰茶寮の庭に紅梅が一樹あつた。実を結ぶころ、葉の間に、更に二三の白い花が開いた。

楊貴妃の姉、號國夫人は玉のような肌を持ち主だが、感ちがいで、その時の流行に乗って美醜を競っていた。しかしまた新しい化粧が似合わないかと思ひ直して、ひそかに紅を落として、もとの姿にしてみた。

山本汎居 山本緑陰 漢学者。一七七七—一八三七年。山本北山の男。当時の詩佛の詩友であり、一時、詩佛は緑陰茶寮に寄寓していたらしい（『詩聖堂詩話』二十一話）。號國夫人 楊貴妃の姉で美貌を誇り、化粧を施さずに素顔で天子に朝したという。『三体詩』に張祐「集靈台」に「號國夫人承主恩（號國夫人、主恩を承く）」の

句がある。

詩題にあるエピソードは、詩佛の『詩聖堂詩話』二十一話に当該の詩と共に載せている。この後、詩を師の山北北山に見せたところ、梅花を淫行の虢國夫人に例えるべきでないとの意見をもらっている。

20 秋夕

久雨新晴秋氣涼 久雨 新に晴て 秋氣 涼し  
疎簾半捲坐斜陽 疎簾 半ば捲て 斜陽に坐す  
一群蚊子香無力 一群の蚊子 春くに力無く  
乍被輕風吹散將 乍ち輕風に吹き散じ將たる

久しく降っていた雨が新たに晴れて秋の涼しい気配がただよう。目の粗い簾を半ば巻上げて、夕日の下に座っている。蚊が一群やってきたが、既に人を刺すほどの力はなく、すぐに微風に吹かれてばらばらになってしまった。

蚊子 蚊。宋詩的な詩材。特に楊誠齋に特徴的に見られる語彙である。

吹散將 將は「上の字を助る語、猶ほ下の取の如し」、『詩家推敲』とある。韻字に用いるのは珍しく、將(も)たると訓じた。

21 鬪簾八首(鬪を鬪る 八首)

宿雨初収雲欲開 宿雨 初て収て 雲 開かんと欲す

輕篋拾菌向林隈 輕篋 菌を拾て 林隈に向ふ

草叢狼籍人踪遍 草叢 狼籍して 人踪 遍し

知道村童侵曉來 知道す 村童の曉を侵し來るを

前の晩からの雨もやっと収まって、雲が開こうとしている。軽い箱に茸を拾って、林の奥に向かう。

草むらは踏みしだかれて、人の足跡があちらこちらにある。どうも村の子供達が夜の明けの前から来ていたようだ。

鬪簾八首 柏木如亭の『詩本草』「松簾(まつたけ)」の項に「詩佛の十絶」に触れる。原形は十首だったかという(注2)。六如の『六如庵詩鈔二編』「西山探簾(西山に簾を探る)」も十絶である。六如は楊誠齋の七言古詩「簾子」を参考にしており、詩佛は楊誠齋と六如の両方を見ていると思われ、語彙や発想の共通点が見られる。

22 (2)

曉來催伴手攜籠 曉來 伴を催して 手づから籠を携ふ  
簾蕩分搜入各叢 簾蕩して 分ちち搜て 各の叢に入る  
脚力未嘗無健在 脚力 未だ嘗て健在無くんばあらず  
應須得雋策元功 應に須く雋を得て元功を策すべし

朝早くから供を促して、自ら籠を携えてきた。

松茸は広く分布していて、分担してそれぞれの群生に探しに行く。

足の力は未だかつて健脚でひけをとったことはない。  
肥えた松茸を手に入れて、大手柄を目論んでいる。

23 (3)

縮藤攀蔓上巖稜 藤に縮り 蔓を攀て 巖稜に上る

朝露未乾苔似蒸 朝露 未だ乾かず 苔 蒸すに似たり

脆滑新抽三四箇 脆滑 新に抽く 三四箇

一驚大呼我先登 一声 大呼す 我 先づ登ると

呼去声(呼、去声。)

藤の蔓にすがり岩角によじ登る。

朝露もまだ乾かず、苔はしっとりとして滑りやすい。

抜いたばかりの、なめらかな松茸を三四本を手にして、

大声で、「一番乗りしたぞ」と大呼した。

先登 一番乗りの意。ここは起句に「巖稜に上る」とあるように

実際に登るの意もかけている。

呼去声 呼は普通は平声だが、諺と通用する場合は仄声(去声)

になる(意味はともに、さげぶ)。詩佛はこのような両韻などの形式的な側面にも関心が深く、後に『両韻便覧』などの著書があるほどである。

24 (4)

散伴重逢成隊行 散伴 重て逢て 隊を成て行く  
穿窬分草各相争 茅を穿ち 草を分て 各の相争ふ  
脚前便有目睫喻 脚前 便ち目睫の喻有り  
却被旁人采幾茎 却て旁人に幾茎を采らる

ばらばらになった仲間がまた出逢って一隊となって進む。

茅をうがって草を分けて、それぞれが争って松茸を求める。

自分の足もととは、「近くて見えぬはまつげ」の例えがあるように、かえって脇の人に数本を取られてしまった。

目睫 目とまつげ。非常に近いもの。ここは、諺の「近くて見えぬはまつげ」。「灯台もと暗し」の類。

25 (5)

坡陀已過渡清溪 坡陀 已に過て 清溪を渡る

密樹陰中晝欲迷 密樹陰中 晝 迷はんと欲す

簇簇菌花張傘盡 簇簇たる菌花 傘を張り尽す

更遲三日爛成泥 更に三日を遅うせば 爛れて 泥と成らん

起伏も越えて、清らかな谷川を渡る。

うつそうと木の茂る中、昼でも迷いそうだ。

群生する松茸は、すっかり傘を開いている。

更に三日遅かったら、腐って泥となってしまったらう。

張傘盡 松茸の熟す最後の段階。楊誠齋「童子」に「傘不如笠笠勝笠（傘は笠に如かず、笠は笠に勝る。）」の句があり、開いていく様子を笠、笠、傘の順番に表現している。六如の「西山探草」にも「張傘」の句がある。

26 (6)

纒来城市色多蕩 纒に城市に來れば 色 多くは蕩す  
争似林間香味全 争でか 林間 香味の全きに似ん  
如今初覺野人貴 如今 初て覺ゆ 野人の貴きを  
玉食無妨嘗此鮮 玉食 妨ぐ無し 此の鮮を嘗るに

松茸は町中にも出回るが、その様子はすっかりしほんでいる。どつして林の中での味わいの完璧であるのになおつか。今、初めて、山暮らしのありがたみがわかった。

この新鮮な松茸の美食を味わうのに、何の妨げもないのだ。

起句 六如「西山探草」に「莫作賣蔬店眼看（賣蔬店の眼看を作すこと莫れ）」、「傳馳已滅玉精神（傳馳するも已に玉精神を滅せん）」の類想句がある。 野人「玉食」『詩聖堂詩集初編』卷十「食童（童を食す）」に「野人玉食寧爲僭（野人の玉食、寧んぞ僭と爲さん）」の類句がある。

27 (7)

却臨歸路又探求 却て歸路に臨んで 又 探求す  
分外餘功更得収 分外の餘功 更に収を得たり  
箇箇溢籩無受處 箇箇 籩に溢れて 受くるに処無し  
茅針貫取挂橋頭 茅針 貫取して 橋頭に挂く

帰り道だというのに、まだ探し求めている。

予定外の功で、更に收穫を得た。

一個一個と籩からあふれて、受け止める余地がない。

茅に貫き通して、担っている籩に掛けておいた。

起句 六如「西山探草」に「斜陽猶欲斂殘功（斜陽、猶ほ殘功を斂めんと欲す）」の類句がある。

28 (8)

瑩潔割珠酥面勻 瑩潔 珠を割て 酥面 勻し  
蔬中無復此奇珍 蔬中 復た此の奇珍無し  
不須湯濯火熏貯 須あらず 湯に濯し 火に熏じて貯ぶることを  
急合分張及四隣 急に合に分張して四隣に及ぼすべし

艶があつて清らかな珠のような松茸を割れば清らかな切り口がおように色つやがよい。

野菜の中でもこれほどの珍味はあるまい。

湯通しして、火でいぶして保存しようなどと思つてはいけない。

すぐに近所中に分配して、この珍味を届けるべきだ。

火熏貯 楊誠齋「薑子」に「作腊仍堪貯盈笈（腊と作すも仍ほ貯て笈に盈るに堪ゆ）」とあり、保存も可能としているのを逆用した。「腊」は干し肉、干物。

刷簾八首は時間の経過に沿った連作的構成を成している。語彙や発想は先人の作の転用が見られる部分があるが、そのまま用いるのではなくそれぞれなんだかの工夫がなされている。

29 自館林至足利途中作（館林より足利に至る途中の作。）

一座叢林當面立 一座の叢林 面に當て立つ

林前路轉入蓬蒿 林前路 轉じて 蓬蒿に入る

雨痕何事忙如許 雨痕 何事ぞ 忙しきこと許くの如き

撥過行人到下毛 行人を撥過して 下毛に到る

ひと山の茂った林が正面にそびえるようにある。

林の前で道を転じて草深いところに入っていく。

道を濡らす雨はどうして、このようにせわしいのであろうか。

旅人を刺すように追い抜かして下野へ到るようだ。

館林 群馬県館林市。 足利 栃木県足利市。 下毛 しも  
つけ。下野。今の栃木県。

30 新寒

一味新寒未慣身 一味の新寒 未だ身に慣れず

綿衣重着起清晨 綿衣 重ね着て 清晨に起く

通宵下盡滿庭葉 通宵 下り尽す 滿庭の葉

又得茶爐半日薪 又 茶炉半日の薪を得たり

誰しも同じ新寒とはいえ、まだ体が慣れていない。

綿入れを重ね着して、すがすがしい朝に目覚めた。

一晩中、落ち続けたのだらう、庭いっぱいには落ち葉だ。

これでまた茶をわかす爐の半日分の薪を得たことだ。

結句 唐・李涉「題鶴林寺」の結句「又得浮生半日閑（又た得たり、浮生半日の閑）」を、句の構造はそのままに内容を具体的な薪

という物に転用して、一種の諧謔味を出している。

31 感舊（旧に感ず。）

紅粉粧成非舊樣 紅粉 粧ひ成して 旧様に非ず

絃歌奏得總新聲 絃歌 奏し得て 總て新声

十年不飲青樓酒 十年 飲まず 青樓の酒

無復人呼小杜名 復た人の小杜が名を呼ぶ無し

紅をつけては流行の化粧を凝らして、

三味線や歌では全て新曲を演奏する。

十年もそうした妓様の酒を飲んでいないので、  
もう風流才子の杜牧になぞらえて呼ぶ人もいない。

唐・杜牧（小杜）「遣懷」に、「十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名。  
（十年、一たび覚む、揚州の夢、贏ち得たり、青樓薄倖の名）」がある。  
市河寛齋はじめ江湖詩社の主要な詩人には遊郭に取材した竹枝詩の作品群があり、実生活でも風流才子といった生活をしていた。  
詩佛にはそうした竹枝詩などの作がない。若き日に小杜と呼ばれたのは詩佛の盟友、菊池五山が知られている（『五山堂詩話』巻一の五山の詩に「薄倖自知如小杜」（薄倖、自ら知る、小杜の如きを）がある。）が、詩佛にも同じようなことがあったか。

32 題陶靖節圖（陶靖節の図に題す。）

決然歸去臥柴麻 決然として歸り去て 桑麻に臥す  
無限人間事可嗟 限り無き人間 事 嗟すべし  
獨怪先生偏愛柳 独り怪しむ 先生 偏に柳を愛するを  
不將清操向梅花 清操を將て梅花に向はず

思い切つて世に背き隠居し、田園に暮らす。

世間は限りなく煩わしいことばかりで、なげかわしい。

ただひとつ不思議なのは、先生がひたすら柳を愛好した点だ。

清らかな操という点で、梅花にかなわないのに。

陶靖節 陶淵明。隠居に關しては『歸去來兮辭』また柳を愛したことは『五柳先生伝』に見られる。

33 墨梅得麻韻（墨梅。麻韻を得たり。）

朦朧猶似夢中看 朦朧 猶ほ夢中に看るに似たり  
只喜奇標不欠些 只だ喜ぶ 奇標の些を欠かざるを  
想得閒庭夜深後 想ひ得たり 閒庭 夜 深けて後  
月横瘦影在窓紗 月 瘦影を横へて 窓紗に在りしを

墨絵の梅はぼんやりとがすんで、まるで夢の中で見るようだ。

ただうれしいのは、梅の優れた点をいささかも失っていないことだ。

ありありと思ひ浮かぶ、閑かな庭で夜が更けた後に、

月が梅の細い影を窓の薄ものに横たえるように映じているのが。

麻韻 下平声六麻の韻目。

結句は宋・林逋「山園小梅」の「疎影橫斜、水清淺、暗香浮動、月黃昏。」の有名な一聯のイメージが感じられる。詩佛は『詩聖堂詩話』三〇話に「疎影暗香の字の如き、一たび林君復（林逋）の手に落て、千載、梅を咏する者、復た優すべからざるなり。」と述べており、この詩はその実践として、詩佛の意識しながらも直接の引用はしないというアレンジの工夫が見られる。

34 梅開 河孔陽小山林堂集（梅、開く。河孔陽が小山林堂に集

ふ)

欲知江畔春深淺 江畔 春の深淺を知らんと欲して

先問小園池上梅 先づ問ふ 小園 池上の梅

昨夜東風解水盡 昨夜 東風 氷を解き尽す

一枝更有一枝開 一枝 更に一枝の開く有り

川辺に春が来たか来ないかを知ろうとして、

まず自分の家の庭の池のほとりの梅を見てみる。

昨夜の春風で池の水はすっかり解け、

ひと枝咲いたのがあったと思つたら、更にもうひと枝咲いていた。

河孔陽 市河米庵。書家、漢詩人。詩佛と親しい。一七七九—

八五八。 小山林堂 市河米庵の書塾名。詩題はここで詩会を開

いての作、の意。

35 杉田村観梅三首(杉田村、梅を観る。三首)

寒力猶嚴春立天 寒力 猶ほ嚴なり 春の立つ天

一雙不借試新年 一雙の不借 新年に試む

未免梅花小因果 未だ免れず 梅花の小因果

又侵風雪到杉田 又 風雪を侵して杉田に到る

寒さのまだ厳しい立春の空のもと、

一足の草鞋を新年に履き始めた。

まだ梅花を毎年訪ねるといふ因果を免れていない。  
今年もまた、風雪を衝いて杉田にやってきた。

杉田村 横浜市磯子区杉田。当時の梅の名所で、現在も妙法寺な

どに面影を残す。 不借 草鞋。人に貸さないから言う。 小

因果 85番詩「鎌田村観梅」に「君と此より年例と為して 来て看

ん、鎌田村裏の梅。」とあり毎年の恒例行事となること。

『今四家絶句』『詩佛百絶』の「柏如亭遊杉田作詩餞之(柏如亭の

杉田に遊ぶ。詩を作り、之を餞す。)」詩に「梅花因果未全了、簑笠

又侵風雪行。(梅花の因果、未だ全くは了せず、簑笠、又、風雪を侵

して行く)」という類想の二句がある。

36 (2)

身為梅花如許忙 身 梅花の為に 許の如く忙し

三年五度着羈装 三年五度 羈装を着く

蕭然行李元相得 蕭然たる行李 元と相得たり

只欠擔頭琴一張 只だ欠く 擔頭の琴一張

この身は梅花のために、これほどの忙しさだ。

三年に五度も旅支度をした。

わびしい旅の荷物はもともとそろえていた。

ただ、荷物に琴一張を欠くだけだ。

結局は句意はよくわかるが、全体とのつながりが判然としないので一案を示す。陶淵明の故事として『晋書』『陶潜伝』に「音律を解せず、而れども琴一張を畜ふ。」などあるように、琴は知識人・文人の必需品である。しかし、楊誠齋「和張功父梅詩十絕句」に「道是梅兄不解琴（道ふ是れ梅兄、琴を解せず）」とあり、梅兄（梅の別称）は琴を理解しないので、それだけは荷物に入れない、の意味か。

37 (3)

山盡有溪溪盡村 山尽て 溪有り 溪 尽きて村

梅花離落已黄昏 梅花離落 已に黄昏

醉來遠向花邊宿 醉來 遠た花邊わがに向て宿す

一夜寒雲護夢魂 一夜 寒雲 夢魂を護す

山が尽きたかと思うと谷川があり、谷川が尽きると村だ。

梅花の生け垣を見る頃には、もう黄昏時だ。

酔つて、またしても花の辺りで宿りをとった。

一晚、冬の雲のように白梅が夢を守ってくれた。

向 於（平字）の平仄による置き換え字。 寒雲 白梅・寒梅  
を喩える。

以上の三首は時間的経過に沿った連作である。

38 集井董堂宅 時董堂新移宅（井董堂が宅に集ふ。時に董堂、

新に宅を移す。）

愛爾茅堂徹底清 愛す 爾が茅堂 徹底に清きを

詩人之外不容盟 詩人の外 盟を容れず

庭前有許櫻欄竹 庭前 許の櫻欄竹有り

靜夜重來聽雨聲 靜夜 重て来て 雨声を聴かん

貴方の新居が徹底的に清らかなのを愛す。

詩人以外を仲間に入れない。

庭先には櫻欄竹があり、

静かな夜に再び訪れて雨音が聴いてみたいものだ。

井董堂 中井董堂。書家。一七五八〜一八一二。 櫻欄竹 ヤ

シ科の常緑低木。観葉にする。

39 初冬得豪韻 梅外宅集（初冬 豪韻を得たり。梅外が宅の集。）

荒庭正面數松高 荒庭 正面 數松 高し

夜厭霜風起怒瀉 夜 厭ふ 霜風の怒瀉を起すを

欲穩寒窓五更夢 寒窓五更の夢を穩にせんと欲して

手磨三尺斬龍刀 手づから磨す 三尺の斬龍刀

荒れた庭の正面に数本の松が高く聳えていて、

夜に、松が寒風に吹かれて荒れ狂つ波のような音を出すのに惱ま

れている。

冬の寒い部屋で夜明けまで穏やかに夢見ようと思つて、

自ら、籠のような松を伐るために、三尺の斬龍刀を研いでいる。

得蒙韻 下平声四蒙の韻目を詩会で割り当てられたこと。梅

外 小島梅外。詩佛と同じ江湖詩社の漢詩人、後に俳諧師。一七七

二一―一八四一。梅外宅での詩会の詩であろう。怒瀟 松の風音

は松瀟などといい、波の音に例えられる。斬龍刀 斬蛇刀。漢

の高祖が白蛇を切った名剣。老松を蟠龍などいうために斬龍刀と

言った。

40 嘲偷児（偷児を嘲ける）

何妨自此出無衣 何ぞ妨げん 此より出づるに衣も無きを

傍着爐紅臥亦宜 炉紅に傍着して 臥すも亦た宜し

小盜不知金玉在 小盜は金玉の在るを知らず

偷殘床上一囊詩 偷み残す 床上 一囊の詩

なんの困ることがあるつか、ここから出かけるのに着物がなくく

い。爐の火にくつついて、寝ているのもいいものだ。

こそ泥は貴重な金や玉があるのに気づきもしなかった。

机の上の一袋の玉稿を盗み残しているのだから。

偷児 こそ泥。 金玉 すくれた詩歌・文章を形容するのに、

金玉の声という。 一囊詩 詩囊。李賀が作った詩句を入れておいたという袋。

41 偶成

半庭残月凍窓紗 半庭の残月 窓紗に凍る

衾薄春寒曉更加 衾 薄つして 春寒 曉 更に加ふ

自覺詩情零落盡 自ら覚ゆ 詩情の零落し尽るを

近來不復夢梅花 近來 復た梅花を夢みず

庭の半分を照らすほどに傾いた有明の月が窓の薄ものに凍りついた

ように見える。蒲団は薄く、春の寒さが明け方にいっそう増す。

詩心がすっかり落ちぶれ果てたと自分で感じるのは、

近頃、夢に梅花を見ないからなのだ。

不復夢 『論語』述而篇に「子曰、甚矣。吾衰也。久矣、吾不復

夢見周公也（子曰はく、甚しいかな、吾が衰るえたるや。久し、吾

れ復た夢に周公を見ず。）」とある孔子の嘆きを転用した。機知を感

じさせる手法だ。

42 春思

深院垂簾獨臥時 深院 簾を垂て 獨り臥す時

爐煙裊裊雨絲絲 爐煙 裊裊として 雨 糸糸

春愁如海無消處 春愁 海の如く 消する処無し

讀盡香奩一集詩 読み尽す 香奩（うづれ）一集の時

奥座敷で簾を垂らしてひとり横になっている時、

爐の煙はゆらゆらとして、雨はしとしと降っている。

春の愁いは海のように大きく、消える時もない。

すっかり『香奩集』を読み尽くしてしまった。

香奩一集詩 韓偓『香奩集』やその影響を受けた詩。香奩体と呼ばれ官能的で美しい詩である。

43 山居

居僻無些塵事牽 居 僻にして 些の塵事の牽く無し

箇中眞是得閑權 箇の中 眞に是れ 閑權を得たり

萬松風過瀟聲綠 万松 風 過ぎて 瀟声 緑に

人在白雲深處眠 人は白雲深き処に在りて眠る

住みかは僻地で、少しの俗事にも関わりがない。

この中で、まさに閑事の主となったと言える。

多くの松に風が通り過ぎて、その響きは緑に染まったようで、

自分は白雲かかる奥深いところで眠っている。

白雲 世俗から離れた隠者的な世界を象徴する景物。

閑權の語は用例の少ない語だが、『柏木如亭』如亭山人稿初集』の

「書懷」の「溪山許可執閑權（溪山、許可して閑權を執らしむ）」、

『晚晴吟社詩』中の木百年「自然」の「天公容我執閑權（天公、我を容れて、閑權を執らしむ）」にあり、当該の三首はいずれも寛政十二年の作と見られる（詩集の排列や刊行年から）。寛政十二年は、信州

中野の木百年の離れに柏木如亭が寄寓しており、詩佛はまたその信州中野を訪ねて『晚晴吟社詩』の詩評を書いているという年であり、

三人は恐らくは同時に顔を合わせている。「閑權」の語はその交流の中から生まれた語であろう。だとすると、詩題の「山居」はやはり

信州中野の晚晴堂と名づけた如亭の寓舎をイメージすると思われる。

44 即事

思清漸至詩時節 思ひ清うして 漸く詩の時節に至る

珍重風光改此間 珍重す 風光の此の間に改まるを

昨夜西風掃紅盡 昨夜 西風 紅を掃ひ尽して

前林又出幾青山 前林 又 出す 幾青山

気持ちもすがすがしく、次第に詩によい時節になってきた。

風景が見る間に変わっていくのは貴重な詩材だ。

昨夜は、西風が春の紅の花を飛ばし尽くして、

前の林は、またいくつもの青山を現し出してきた。

詩時節 この詩は晩春から初夏へ移行する時期のようだが、そうした移り変わる季節が詩材が多く、詩の時節といふことであろうか。

45 重陽之日福田務廉贈菊一枝因賦而贈

(重陽の日、福田務廉、菊一枝を贈る。因て賦して贈る)

一枝黄菊折将来 一枝の黄菊 折り将ち来る

頓使秋光到草莱 頓に秋光をして 草莱に到らしむ

若識此花如许好 若し 此の花の許の如く好きを識らば

合従前日事壇栽 合に前日より壇栽を事とすべし

一枝の黄菊を折つて贈つてくれた。

にわかに、秋の好風景が荒れた草むらにやつてきた。

もし、この花がこのように美しいのを知っていれば、

以前から垣根の手入れをしてあげばよかった。

重陽 陰曆九月九日の菊の節句。菊の花を浮かべた酒を飲んで邪  
気を除く行事が行われた。 福田務廉 福田竹庵 国学者、歌人。

一七七四、一八一九。

46 秋田途中三首

淡淡輕煙天醜雨 淡淡たる輕煙 天 雨を醜す

鷄聲相喚竹村幽 鷄声 相喚て 竹村 幽なり

問時合以炊時間 時を問はば 合に炊時を以て問ふべし

田舎従来無漏籥 田舎 従来 漏籥無し

淡い霧がかかる空が雨を降らそうとしている。

鶏の音が響き合つて、竹林のある村は静かだ。

時刻を訪ねるときは、飯の時で尋ねなくてはいけない。

田舎ではもともと時計などはないのだから。

鷄聲 『老子』の「鶏犬相聞こゆ。」以来の奥深い村里の一景物で

ある。 漏籥 水時計の目盛り。こゝは時計そのもの。

この時の秋田行は寛政五年に師の山本北山に供した時のそれとい

う(「年譜」)。詩佛は晩年に秋田藩に出仕する。

47 (2)

鼓子花開日欲中 鼓子花 開きて 日 中せんと欲す

蝉聲亂噪滿林風 蝉声 乱れ噪ぐ 滿林の風

煙風深處君知否 煙風 深き処 君 知るや否や

折取松枝掃毒蟲 松枝を折取して 毒虫を掃ふ

昼顔の花が開いて、日も真上に来ようとしている。

蝉の音が乱れ鳴き、林いっぱい風が通っていく。

君は知っているだろうか、山の気の深い場所では、

松の枝を折取つて、毒虫を払いながら歩くのだ。

鼓子花 昼顔の花。昼間開いて夕刻にしほむ。 日欲中 正午。

松枝 あるいは松明にしたか。

照燭貪程歩曉風 燭を照し程を貪て 曉風に歩す  
 所行莫不總鳴蟲 行く所として総て鳴虫ならざる莫し  
 夜明回顧過來處 夜 明けて 過來の処を回顧すれば  
 野草花開數里中 野草 花 開く 數里の中

旅程をかせこうとまだ早朝のうちから、風の中、灯を点けて歩み始める。行くところ行くところ、どこへ行っても虫の声ばかりだ。夜が明けて、いま来た道を振り返ると、數里に渡って野草の花が咲き乱れる中を歩いていたのだ。

49 薩埵嶺望富士山(薩埵嶺、富士山を望む。)  
 唯有孤峯常戴雪 唯だ孤峯の常に雪を戴く有り  
 銀山拔出萬青螺 銀山 萬青螺より拔出す  
 此觀曾在畫圖看 此の觀 曾て画図に在て看る  
 今比畫圖雲較多 今 画図に比すれば 雲 較や多し

ただひとつだけ万年雪を戴いている山がある。  
 銀のように輝く山は、周囲の山から突出している。  
 この景色はかつて絵で見たことがあるが、  
 いま、現実と絵を比較すると、雲が少し多いようだ。

薩埵嶺 薩埵峠。静岡県清水市興津と庵原郡由比町との境にある

『詩聖堂詩話』十九話に、寛政九年に薩埵峠で海野燻齋親子に邂逅した話題があるが、次の詩と一連とすれば、寛政七年の伊勢行の途中か。

50 拝太神宮(太神宮を拝す。)  
 宗祀一從基此鄉 宗祀 一たび此の郷に基せんより  
 綿綿更度幾星霜 綿綿として 更に幾星霜を度る  
 欲知神統長無極 神統の長きこと極り無きを知らんと欲せば  
 開關以來唯一王 開關以來 唯だ一王

開祖が最初にこの地に宮を建立してから、綿々と、いくつもの時代を経てきた。神統が長く限らないことを知ろうとするならば、天地開關以來の唯一の神を思えばよい。

太神宮 伊勢神宮。原本では、太神宮・神・王の三箇所で改行している(平出で高い敬意を表す)。 唯一王 唯一で絶対的な神。伊勢神宮の正殿は他に類例のない唯一神明造である。  
 『詩聖堂詩話』四話に、詩佛が寛政七年に伊勢を訪ね、当時の盟友、中野素堂の案内で伊勢神宮に詣で、この詩を作った記事がある。

51 秋日晏起

朝陰不散窓猶暗 朝陰散せず 窓 猶ほ暗く  
臥弄烟筒欲起慵 臥して烟筒を弄して 起んと欲すれども慵し  
送火小童時報道 火を送る小童 時に報道す  
桃紅已上醉芙蓉 桃紅 已に醉芙蓉に上ると

朝の雲が晴れず、窓はまだ暗く、  
寝ながら煙管を弄んで、起きようとするが、それも面倒だ。  
煙草盆の火を持ってきた子供が知らせて言つには、

「酔芙蓉がもう、桃のような紅色に染まりました」

晏起 寝坊すること。 酔芙蓉 芙蓉の一変種で、朝の咲き始  
めの花は白いが、時間が経つにつれて変色し、夕方には薄紅色にな  
る。

52 春雨

看花約罷身無事 花を看る約罷て 身 無事  
自笑閑人不耐閑 自ら笑ふ 閑人の閑に耐へざるを  
板屋不知方有雨 板屋 知らず 方に雨有ることを  
臥聴疎滴落檐間 臥して聴く 疎滴の檐間に落るを

花見の約束が中止になって、何もやることがなくなつた。  
自分でもおかしいのは、ひま人がひまに堪えられないことだ。  
板葺きの屋根なのに、ちょうど雨が降っていたことに気づきもしな

かつた。寝ながら軒からぼたぼた垂れる水滴の音を聞いている。

板屋 板屋は田舎びた粗末な屋根の意で、普通は雨が当たると音  
をたてやすいが、ここはそれでも気づかない細かな霧のような春雨  
の性質を表現した。軒から垂れてはじめて音をたてた。雨に気づか  
ないと言ふことは、花見の中止にも自分では気づかず、突然知らさ  
れて茫然とした、の意。

53 送佐藤大道西遊（佐藤大道の西遊するを送る。）

五千里外行遊客 五千里の外 行遊の客  
八九月交歸去期 八九月の交 歸去の期  
珍重秋宵風月夜 珍重す 秋宵 風月の夜  
須磨明石恰過時 須磨明石 恰も過る時

五千里ものかなたまで旅する人、

八月か九月の頃に帰る予定だという。

そうであれば、中秋の夜の風と月は、貴重だ。

なぜなら、帰りの道の須磨か明石をちょうど過ぎるあたりだろつから。

佐藤大道 佐藤一斎 儒者。大道は字。一七二一—一八五九。一  
斎は平戸侯の招きで寛政十二年四月六日に江戸を発ち、九月に江戸  
に帰つた（佐藤佩刀「補正・佐藤一斎先生年譜」、『明治大学教養論集』  
九十九号）。

五千里外へ 起句承句の「五千里外」の対句は、白居易「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」の前聯「三五夜中新月色。二千里外故人心」をもとにする。ちなみに、この時の佐藤一斎の詩「西肥客中」(『愛日樓詩』)に、同じ典拠を用いた「三千里外獨遊人」の句があり、中秋の月は長崎あたりで見たらしい。

須磨は歌枕で古くからの月の名所である。『源氏物語』須磨の巻に「二千里外故人心」を誦した場面が思い出される。

54 (2)

雨痕晴盡雲時間 雨痕 晴尽す 曇時の間  
満路深泥不厭難 満路の深泥 難きを厭はず  
明日出關先一咲 明日 関を出て 先づ一咲せん  
雲消富士見全山 雲消て 富士 全山を見はず

雨の痕はあるが、わずかの間に晴れ渡った。  
道いっばいの深い泥に歩きつらいのも厭わない。

明日、関を出てまず一笑するだろう。  
雲が消えて富士山が全容を現すからだ。

55 (3)

長崎估客三呉豪 長崎の估客 三呉の豪  
日齋珍奇渡海瀟 日々 珍奇を齋して 海瀟を渡る

賈院相違君必道 賈院 相違はば 君 必ず道へ  
櫻花不是白櫻桃 櫻花 是れ白櫻桃にあらずと

長崎に来ている商人は、はるばる異国から来た豪の者だ。  
海原を渡って、日々珍しい品をもたらしている。  
その中で知識人とあつたら、君よ、必ず言つて欲しい。

日本の「桜」は「白櫻桃」ではないのだ、と。

賈院 才学ある人を諸侯から中央政府に推薦すること。ここはその人を指し、商人の中でも詩文などを弄する知識人を指す。櫻花 櫻は元来の意味は、ゆすらうめであり、所謂日本の桜ではなかつたことを言う。

桜の詩は『詩聖堂詩話』の第一話で、その歴史を取り上げている。現実主義的な清新性靈派の理論では当然日本の景物を積極的に詩中に取り上げることになるが、その日本的景物の代表が「桜」である。そつした日本漢詩の独自性の主張も感じられる。

56 自鎌倉到金澤途中作(鎌倉より金沢に到る途中の作。)

險路初成途出東 險路 初て成て 途 東に出づ  
到今壮士見其功 今に到て 壮士 其の功を見る  
三郎自有五丁力 三郎 自ら五丁の力有り  
擊破青山一夜通 青山を擊破して 一夜に通す

険しい道がやっと完成し、道が東に通じるようになった。今に至っても、それを成した英雄の手柄を見ることが出来る。朝比奈三郎は、もともと五人力であったというのが、青々した山を切り開いて一夜にして通じさせたのだ。

金澤 横浜市金沢区。 險路 所謂、朝比奈の切り通し。鎌倉と金沢をつなぐ。今も当時の面影を残す山道である。和田義盛の三男、朝比奈三郎が大力で一夜で切り開いたという伝承が、江戸初期の『新編鎌倉史』などに既に見られる。史実としては執権の北條泰時が指揮に当たったという(『新編相模國風土記稿』など)。

57 浦賀雑詠五首

潮来港口晚煙凝 潮 港口に来て 晚煙 凝る  
兩岸人家齊上燈 兩岸の人家 齊しく灯を上す  
入夜東西初認得 夜に入て 東西 初て認め得たり  
當樓山缺月時昇 樓に當て 山 欠て 月 時に昇れば  
潮が港の入口まで来て、夜の霧が垂れ込める。  
兩岸の人家ではみなそろって灯りをともす。  
夜になって、東西がやっとわかるようになった。  
樓に面して、山の合間から、時々月の昇るのが見えるからだ。

浦賀 神奈川県横須賀市。浦賀港は細長く河のようになっている

ため詩中で「兩岸」と表現した。

『詩聖堂詩集初編』巻五にも五言律詩「浦賀」がある。

58 (2)

獨臥高樓到日暈 独り高樓に臥して 日の暈るるに到る  
簾紋輕軟碧於苔 簾紋 輕軟にして 苔よりも碧なり  
炎蒸乍散涼如水 炎蒸 乍ち散じて 涼 水の如し  
自判今宵有雨來 自ら判ず 今宵 雨有て來るを

一人で高樓に寝そべって日が暮れる時になってしまった。敷物は軽く軟らかで苔よりも深い緑だ。

じめじめした蒸し暑さはさつと去って、水のような涼氣が来る。自分勝手に、今夜は雨が降るだろうと想像している。

59 (3)

一雨一句容易過 一雨一句 容易に過ぐ  
今朝重五未全晴 今朝 重五 未だ全くは晴れず  
不看鬪草兒孫鬧 看す 草を鬪はず兒孫の鬧しきを  
只聽菰蒲風戰聲 只だ聴く 菰蒲の風に戦う声

ひと雨が十日も降り続いたが、あつという間に過ぎた。今朝は五月五日だというのに、いまだに全くは晴れていない。草合をする子供達の騒がしい声も聞こえない。

ただ、真菰や蒲の風にそよぐ音が聞こえるだけだ。

鬮草 草合（くさあわせ）は五月五日の遊びである。

60 (4)

松花如雨撲簾櫳 松花 雨の如く 簾櫳を撲つ

客夢醒時海日紅 客夢 醒る時 海日 紅なり

半月不聞都下信 半月 聞かず 都下の信

今朝又是鼈頭風 今朝 又是れ 鼈頭べつちの風

東西南北無定土人謂之鼈頭風

（東西南北、定り無きを、土人、之を鼈頭の風と謂ふ。）

松の花が雨のように簾のかかったれんじ窓を打つ。

旅人の夢が覚めると、海上の太陽が真っ赤である。

半月の間、都から便りもなく

今朝はまた、べつとう風が吹いている。

東西南北と方向の定らない風を地元の人「べつとうかせ」と呼んでいる。

半月 前の詩からも荒天が続いていることがわかる。 鼈頭風

べつとうかせ、の当て字。東京湾から東海道の漁村にかけて用いら

れた風の名。恐ろしい別当から出来た語という説もあるように、突

風で危険な風というが、地方によってその方角や性質は異なる。（関

口武『風の事典』原書房などによる）

61 (5)

月黒前灣不看舟 月 黒くして 前灣 舟を看す

岸鳴暗浪帶風流 岸 鳴て 暗浪 風を帯て流る

輕橈時向潮頭轉 輕橈けいじょう 時に潮頭しほづみに向て転すれば

萬斛明珠碎不収 萬斛ばんこくの明珠 砕けて収らず

月は暗く、前の灣には舟も見えない。

岸では、暗い中に波が風に吹かれて音を立てて流れている。

小さな舟で潮の中で棹を転じると、微波に月光が映じて、

たくさんたぐさの明るい玉が砕けたようになって収まらない。

萬斛 非常に分量の多いこと。斛は容量の単位。

この「浦賀雜詠五首」は、雜詠というように時間的経過に沿う連作ではなく、様々な風景をコラーージュした作であり、地方風俗に取材した本来の竹枝的作品である。

62 出都（都を出つ）

纈出都門日欲傾 纈せきに都門を出れば 日 傾かんと欲す

客心酷愛晚風清 客心 酷だ愛す 晚風の清きを

一條村路兩行樹 一條の村路 兩行の樹

人在松杉影裏行 人は松杉影裏に在て行く

やつと都を出れば、日はもう傾こうとしている。  
旅人としては晩の風の清らかなのを最も愛す。

一本の田舎道と両側の並木。  
旅人は松や杉の影の中を歩いて行く。

出都 この詩から一連の旅の詩が続く。寛政十二年秋、信州中野の柏木如亭を訪ねる旅である。

63 題須田子純所居（須田子純の所居に題す。）

平田繞屋短籬成 平田 屋を繞て 短籬 成る

緑樹干草竹數莖 緑樹 干草 竹 數莖

满地清陰涼似水 滿地の清陰 涼 水に似たり

雨聲過後又蟬聲 雨声 過る後 又 蟬声

広々とした田が、家のまわりを囲み、低い生垣が出来ている。

青々とこんもりした大木に竹が数本ある。

庭いっぱい気持ちよい陰を作り、涼しさは水のようにだ。

雨音が過ぎ去ると、次は蟬の声だ。

須田子純 「年譜稿」によれば善光寺の医者という。ただ詩の配列上、江戸と碓氷峠の間なので疑問が残る。 干草 大木の太さを計る単位。

64 度碓氷嶺（碓氷嶺を度る。）

雲脚如烟黏地過 雲脚 烟の如く 地に黏して過ぐ

樹梢零露濕輕莎 樹梢の零露 輕莎を濕す

行人相遇多相問 行人 相遇ふ 多くは相問ふ

山下今朝有雨塵 山下 今朝 雨有るや塵や

雲が低く垂れ込めて霧のように地面に粘り着くように過ぎていく。梢から滴り落ちる露が、軽やかに伸びるはますげを濡らしている。旅人で行き会う人の多くはこのように尋ねる。

ふもとは今朝雨が降ったかどうか、と。

碓氷嶺 碓氷峠。中山道の難所で群馬県碓氷郡と長野県北佐久郡

の境。 輕莎 莎ははますげ。カヤツリクサの一種で雜草である。

背の高い草で、雨に濡れるとしなるので軽やかと表現した。

65 雨過小諸稻伯弓宅與牧野子大同賦

（雨、小諸の稻伯弓宅に過る。牧野子大と同じく賦す。）

客亭靜夢迢迢 客亭 昼靜にして 夢 迢迢

一陣驚雷破寂寥 一陣の驚雷 寂寥を破る

雲脚隔山猶里許 雲脚 山を隔つること猶ほ里許

雨聲先已到庭蕉 雨声 先づ已に 庭蕉に到る

旅の座敷では昼も静かで、夢を見る時間も長く感じる。

ちよつとの間の激しい雷雨が、静けさを破った。

垂れ込めた雲はまだ山を隔てた一里ばかりも先だ。

雨音はまず庭の芭蕉の葉から始まる。

稲伯言、稲垣伯言。小諸藩家老。『詩聖堂詩話』四十二話のこの時のエピソードに、三四日宿したとある。牧野子大 不明だが小諸藩主は牧野氏なので一族か。 到庭蕉 芭蕉の葉は雨で大きな音を発するので、それで最初に雨に気づく。

66 小諸道中

寒蝉亂噪似秋回 寒蝉 亂れ噪ぎて 秋の回るに似たり

晚日輝輝雲半類 晚日 輝輝として 雲 半ば類る

知道上毛猶有雨 知道す 上毛 猶ほ雨有ることを

東風如水度山來 東風 水の如く 山を度りて来る

土人云東風涼甚則上毛有雨之候

(土人云ふ、東風、涼甚しきとき則ち上毛雨有るの候なり、と。)

蝸がうるさく鳴いて、秋がめぐってきたようだ。

夕日はきらきらとして、雲はもうほとんど勢いがなくなってきた。

上毛にはまだ雨が降っているのがわかる。

それは、東風が水のように冷たく山を越えて来たからだ。

地元の話では、東風がひどく冷たい時は、上毛は雨という。

上毛 かみつけ。上野国 上州、今の群馬県。

67 木百年得月樓偶作(木百年の得月樓、偶作)

竹仆松横岸半類 竹仆れ 松横りて 岸 半ば類る

三間茅屋枕溪隈 三間の茅屋 溪隈に枕む

奔湍去此應無里 奔湍 此を去ること 應に里無かるべし

一道繩流浮雪來 一道の繩流 雪を浮べて来る

竹は倒れ、松は横たわって、岸はなかが崩れている。

そんなところに三間の粗末な家が谷川に臨んで建っている。

激しい流れは、ここから一里もないだろう。

そこから、一筋の繩やかな流れが、雪を浮かべたまま流れてくる。

木百年得月樓 木百年は信州中野の晚晴吟社の中心詩人。一七六

八〜一八二。得月樓はその書齋か。 里 距離の単位だが、こ

こは中国風に一里が五百メートル程度のイメージである。

68 (2)

無心久已雲為伴 無心 久しく已に 雲を伴と為す

慣住亂山堆裏村 住するに慣る 乱山堆裏の村

只有溪聲耳不熟 只 溪声の耳に熟さざる有り

夜深故向枕頭喧 夜 深て 故に枕頭に向て喧し

無心となつて久しくもう雲を供としている。  
多くの山々に囲まれた村に住むのにも慣れた。  
ただ、谷川の水音だけが耳に慣れない。  
夜も更けて、寝ようとすると、特にやかましい。

69 贈柏永日二首（柏永日に贈る二首）

三年不見信中信 三年 見ず 信中の信

皆道君成泉下塵 皆な道ふ 君 泉下の塵と成ると

願得越山多少句 願くは 越山多少の句を得て

持知世上妬才人 持して 世上 才を妬むの人に知らしめん

三年もの間、信州からの便りがなかった。

みなは、君が既にこの世にいないのではないかと噂していた。

願わくは、越後の旅で得た詩句を手に入れて、

持ち帰って世間の、君の才能を妬む人に知らしめたいと思う。

柏永日 柏木如亭。漢詩人。「如亭は中野の晚晴堂を本拠にしなが  
ら、寛政十年から翌十一年には越後一帯を遊歴した」（岩波文庫『詩  
本草』解説）という。一七六三〜一八一九。

70 (2)

八千八水歸新潟 八千八水 新潟に帰し

七十四橋為六街 七十四橋 六街を為す

簡是舒亭越中句 簡は是れ 舒亭が越中の句

雄渾可見寫胸懷 雄渾 見るべし 胸懷を写すを

前聯永日新潟句（前聯、永日が新潟の句。）

八千八もの川は全て新潟に注ぎ、

七十四もの橋がかかり、六つの大通りを成している。

この聯は如亭の越後を詠んだ句である。

円熟の筆致で胸の内を描くのを見て欲しい。

前の二句は柏木如亭の「新潟」の句を使った。

舒亭 柏木如亭は、はじめ舒亭の表記を用いた。

自注にあるように、起句承句は柏木如亭の七言律詩「新潟」の前

聯である。如亭の『如亭山人稿初集』『詩本草』では「為」を「成」

に作る。

71 題晚晴吟社巻首 并序

予訪柏永日信濃得其徒木百年高聖誕輩十有餘人之詩批評輯録不計為  
巻欲携歸示都下社友因謀上梓名曰晚晴吟社詩晚晴永日齋名也

（予、柏永日を信濃に訪ふ。其の徒、木百年・高聖誕が輩十有餘人の  
詩を得て、批評・輯録して、計らず巻を為す。携へ歸て都下の社友  
に示さんと欲す。因て謀て梓に上す。名づけて『晚晴吟社詩』と曰  
ふ。晚晴は、永日の齋名なり。）

私は、柏木如亭を信州に訪ねた。如亭の門人である、木百年・高聖誕など十数人の詩を得て、批評・編集するうち、思いがけないことと一卷となった。これを江戸に持ち帰り江戸の詩仲間に見せようと思った。そこで相談の上、出版した。題名を『晚晴吟社詩』という。晚晴は如亭の書齋の名である。

霜早山村秋欲殘 霜 早くして 山村 秋 残せんと欲す  
詩愁不似客愁寬 詩愁は似ず 客愁の寬きに  
晚晴堂畔葉如錦 晚晴堂畔 葉 錦の如し  
留與遊人自在看 遊人を留與して 自在に看せしむ

冷気が早くやってきて、山村の秋は終わろうとしている。  
詩の悩みは、旅愁のゆったりしているのには似ていない。  
晚晴堂のあたりには、紅葉した葉（も詩も）が錦のように、  
旅人を引き留めて、自由に見させてくれる。

詩愁 楊誠齋に多く見られる語である。本書にも四例用いられるが、総合して考えると、作詩や推敲や添削などに詩に関わる苦勞・悩みを指すと思われる（他の三例は81、84、99）。ここでは錦のよじな詩の作品群を批評する悩みであろう。

この詩と次の詩は『晚晴吟社詩』の巻頭に載せる序である。

72 (2)

一 淪清茶一炷香 一 淪いちやくの清茶 一 炷しほの香  
手開詩巻細平章 手づから詩巻を開て 細かに平章す  
自嗤身與蜂媒似 自ら嗤わらふ 身は蜂媒と似たるを  
品白評紅盡日忙 白を品し紅を評して 尽日 忙し

一服の清らかな茶と一くゆりの香のもと。

手づから詩巻を開いて、細かく品評する。

自分で笑うには、自身が花の間を飛び回る蜂に似ていることだ。

白い花、赤い花（のような様々な詩）を批評して、一日中忙しい。

柏木如亭が信州中野での漢詩教授用に作った『訳註聯珠詩格』に劉後村「蜂媒」があり、詩句に「為花評品嫁東風」がある。淪  
『晚晴吟社詩』は「昇」（鼎の異体字）に作る。『晚晴吟社詩』と『詩聖堂百絶』の刊行はほとんど同時期であるが、「淪」が決定稿である。

73 歲晚

柳縷翠還春已近 柳縷りゅうる 翠 還て 春 已に近し  
新題手搗課兒童 新題 手づから搗て 兒童に課す  
世間無限煩囂事 世間 限無き 煩囂はんじょうの事  
不到瘦梅詩屋中 瘦梅詩屋の中に到らず

柳の細い枝に緑が蘇ってきて、春も近い頃となった。

新年の詩の課題を手づから掲げて児童に示す。  
歳末であり、世間では限りなく煩わしいことばかりだが、  
私、瘦梅の詩社の中には来ることはない。

瘦梅 詩佛の別号。

74 元旦試筆

如酥小雨曉初晴 酥の如き小雨 曉に初て晴る  
惻惻春寒逼骨清 惻惻たる春寒 骨に逼て清し  
頓醒梅花帳中夢 頓に醒む 梅花帳中の夢  
紅嗽窓外恰鶯聲 紅嗽 窓外 恰も鶯声

しつとりとした小雨が明け方になってやっと晴れた。  
ひしひしと迫る春の寒さが骨にしみて清らかな感じだ。  
にわかには梅花の帳で見ていた夢が覚めた。

それは、朝日の当たる窓の外では、(梅花帳の夢らしく) ちょうと鶯  
の声がしたからなのだ。

試筆 書き初め。

75 自神奈川渡杉田有風不得航

(神奈川より杉田に渡るに風有て航ることを得ず)  
海面潮高欲渡難 海面 潮 高くして 渡んと欲すれども難し

樓頭三日倚闌干 樓頭 三日 闌干に倚る  
東風未及取花去 東風 未だ花を取り去るに及ばず  
到縹吹開我恰看 縹に吹開くに到て 我 恰も看ん

潮で海面が高くなり、渡ろうとしても無理だ。  
楼上で三日、欄干に寄りかかって待っている。

春風はまだ花を散らせることはないだろう。

風が花を満開にさせた時になって、ちょうとよく見ることにしよう。

神奈川 神奈川宿

「杉田村觀梅」の詩は35以下にある。また、『采風集』に木百年の  
「杉田村觀梅」に「又是此遊三日程」とある。或いは同時の作か。

76 小橋

野水橋成村有隣 野水 橋 成て 村に隣有り  
護堤楊柳翠蘇春 堤を護する楊柳 翠 春に蘇す  
除非漁老牧童外 除非 漁老牧童を除非するの外  
才度看梅三四人 才<sup>わづか</sup>に梅を看る三四人を度す

野の小川に橋ができて村に隣が出来た。  
堤を守る柳も、緑が春になって蘇ってきた。  
漁師や牧童を除いて、  
わずかに梅見の三四人を渡すくらいだ。

除非 たたくだけ。

77 病起

記得前頭得病初 記得す 前頭 病を得るの初  
藥壇芽短綠猶踈 藥壇 芽 短くして 綠 猶ほ疎なるを  
如今偶就藥芽看 如今 偶ま 藥芽に就て看れば  
臥負春光一尺餘 臥して春光に負くこと 一尺余

よく覚えていて、以前、病気のはじめの頃、藥草を植えたところに、  
まだ芽が出たばかりで緑もまばらだったのを。  
いま、偶然、藥草の芽を見ると、

病気で寝ていて春景色も見なかつたうちに、一尺も伸びていた。

78 梅花開後得詩六首（梅花、開きて後、詩六首を得たり）

病驅猶被餘寒約 病驅 猶ほ余寒に約せらる  
不出茅檐半月来 茅檐を出でざること 半月来  
知道江村已春好 知道す 江村 已に春好きを  
門前来賣滿開梅 門前 来り売る 滿開の梅

病気の身は、まだ春の寒さに閉じ込められている。  
粗末な我が家から外出しないのが、もう半月にもなる。  
よくわかっている、川辺の村ではもう春景色がよい時節なのは、  
門前に満開の梅を売りに来ているのだから。

前年に刊行の『詩聖堂詩話』四十五話に病中の詩の例として載せ  
る。本文は起句に異同があり、「病驅曾被寒欺得（病驅、曾て寒に欺  
き得らる）」となつてゐる。寒さの為にまだ梅が咲かないと欺かれた  
の意になる。やや理屈に過ぎるのを添削したか。

79 (2)

窓外梅花如許奇 窓外の梅花 許の如く奇なり  
朝来向佛欲供時 朝来 佛に向て 供せんと欲する時  
又愁撼樹減春色 又 愁ふ 樹を撼して春色を減せんことを  
却去街頭買一枝 却て街頭に去て 一枝を買ふ

窓の向ここの梅花は、このように美しい。

朝にこの花を仏に供えようと思つた時のこと。

また、木をうごかして春景色の趣を減らしてしまつたと心配になり、  
わざわざ街頭に行つて、ひと枝の梅を買つてきた。

撼 ゆする。うごかす。

80 (3)

詩思困困難成睡 詩思 困困として 睡を成し難し  
起拂衾綯推碧紗 起て衾綯を払て 碧紗を推す  
已覺春宵全備景 已に覺ゆ 春宵 全く景を備ふるを  
朦朧淡月在梅花 朦朧たる淡月 梅花に在り

詩に行き詰まって眠れなくなった。

そこで、蒲団を上げて窓の薄絹を開けた。

すぐに春の宵が（作詩に）完全な景色を作っているのがわかった。  
おぼろに淡い月が梅の花にかかっているのだ。

81 (4)

引起詩愁不耐清 詩愁を引起して清に耐へず

凭欄直欲向三更 欄に凭れて 直に三更向らんと欲す

月光會得人心否 月光 人心を會し得るや否や

比到梅邊特地晴 梅邊に到る比よほい 特地に晴る

詩の悩みを起こして、たまらなく清らかな気分だ。

欄干に寄って、すぐにも夜中になろうとしている。

月光は、人の気持ちを理解しているのだろうか。（まるで理解しているかのように）光が梅の辺りを照らす頃、特段に輝いた。

詩愁 71 詩参照 向三更 向晩、向夕などと同じ使い方。

82 (5)

一陣春寒呼夢醒 一陣の春寒 夢を呼んで醒す

布衾曉覺薄於雲 布衾 曉に覺ゆ 雲よりも薄きを

欲興先喚兒童看 興せんと欲して先づ兒童を喚んで看せしむ

昨夜梅花瘦幾分 昨夜 梅花 幾分を瘦するやと

ひとしきりの春の寒さ夢を破る。

明け方には、夜具が雲のように薄く感じられる。

（梅を見て）興じようと思ひ、先ず子供を呼んで様子を見させる。  
昨夜の寒さで、梅花はどれほど瘦せたか、と。

83 (6)

梅花が瘦せるとは具体的にはよくわからないが、必ずしも枯れて

きたというマイナスの表現ではなく、脱俗の高土に喻えられる姿は

瘦せているべきなのであろう。詩佛の別号の瘦梅もそうしたイメー

ジからだろうか。

小梅村裏探梅去 小梅村裏 梅を探り去る

吹面輕風不識寒 面を吹く輕風 寒を識らず

莫恨行行小橋斷 恨むること莫かれ 行き行て小橋の断ゆるを

清標却在隔流看 清標 却て流を隔てて看るに在り

小梅村に（その名のとおり）梅を訪ねてやってきた。

微風が顔を吹くが、寒さは感じない。

残念に思うことはない、小さい橋の壊れているのを。

梅の気高い姿はかえって流れを隔てて見るのがいいのだ。

小梅村 向島小梅村。小梅堤があり、いくらかの梅も植えられて

いた。隠毛などが多い土地。

隔流看 梅を流れを隔てて見ると言うことに關しては、楊誠齋「池亭雙樹梅」に「只合池亭隔流看（只だ合に池亭、流れを隔てて看るべし）」の句がある。また、詩佛には桜に關して、『詩聖堂詩話』一話で「風姿不必隔流評（風姿、必ずしも流れを隔てて評せず）」という自身の詩句を紹介しているが、これは梅は流れを隔てて見るのがよいが、桜はそうではない、の意であるつか。この詩句は、『詩聖堂詩集初集』では「風姿何必待詩評（風姿、何ぞ必ずしも詩を待ちて評せず）」と改めている。梅の表現を逆転した表現がわかりにくかつたための変更かもしれない。

84 午睡

一身瘦不耐詩愁 一身 瘦せて詩愁に耐へず

聊就幽窓作睡謀 聊か幽窓に就て 睡の謀を作す

冷雲壓夢驚醒後 冷雲 夢を圧して 驚き醒て後

日轉梨花到枕頭 日 梨花に転じて 枕頭に到る

一身は瘦せて、たまらなく詩に悩む。

いささか静かな部屋で昼寝でもしようかと思う。

冷たい雲が夢を圧倒して、驚き目覚めると、

日光が梨の花に移って、枕元にまで照らしていたのだった。

午睡 昼寝 詩愁 71詩参照

冷雲 梨の花のイメージが夢に現れたものであろう。

85 與井伯直平秋邦油屋太郎吉同鎌田村觀梅

（井伯直・平秋邦・油屋太郎吉と同じく鎌田村に梅を観る。）

二月七日輕暖日 二月七日 輕暖の日

一分未損十分開 一分も未だ損せず 十分に開く

與君從此為年例 君と此より年例と為して

來看鎌田村裏梅 來看 鎌田村裏の梅

二月七日のやや暖かい日は、

梅の花は一分も傷まず、しかも全部が開いている。

貴方達とこれから毎年の恒例として、

蒲田村へ梅見に来るとしましょう。

井伯直 中井董堂 既出（38詩）。 平秋邦 未詳。 油屋太

郎吉 元禄頃の日本橋小舟町の雜穀商の名というが關係は未詳。

鎌田村 蒲田梅林。 文政年間に梅屋敷ができたが、それ以前から

梅が多かった。

86 和寬齋先生春日偶成（寬齋先生の「春日偶成」に和す）

深院沈沈晝抵年 深院 沈沈として 昼 年に抵る

滿簾晴日倚床眠 滿簾の晴日 床に倚て眠る

梅花落盡無心出 梅花 落尽して 出づるに心無し

閑過清明前後天 閑過す 清明前後の天

奥の座敷はひっそりとして昼間が一年のように長い。  
簾いっばいにあたる日光のもと、机に寄りかかって眠る。  
梅花は散りつくして、出かける気にもならない。  
清明前後の天をすっかり何もせずに過こしてしまつた。

寛齋先生 市河寛齋。儒者、漢詩人。詩佛の詩の師匠。一七四九  
〜一八二〇。 清明 春分後十五日。陽曆四月五日頃。

市河寛齋の「春日偶成」という詩は寛齋の詩集には見当たらない  
が、「四月十三日荒木道中」(『寛齋先生遺稿』巻二)という詩が清明  
の好風景を描いていて、その詩の結句が「又是清明前後天」であり、  
それに和した詩として、すっかり清明前後天を閑過してしまつたと  
応じるのはふさわしい。しかし、この詩の前に「天民」有梅花落盡  
無心出、閑過清明前後天の句、意の頗る偏なるを覺ゆ。賦して示  
す」というこの詩に寛齋が応じた詩があるので、『寛齋先生遺稿』の  
編年配列とは矛盾する。

87 梅

點檢紅紅白白群 紅紅白白的群を点檢す  
孤清到底莫如君 孤清 到底 君に如くは莫し  
世間護道詩人瘦 世間 護に道ふ 詩人 瘦せたりと  
愧比梅花未十分 愧づ 梅花に比すれば 未だ十分ならず

紅梅白梅の群れているのを、ひとつひとつ見て歩く。

孤独に清らかなのは、君にかなうものはない。  
世間は、いい加減に詩人の瘦せぶりを言っているようだが、  
梅花に比べればまだまだ十分でないのを恥じる。

護 あざむく意。

詩人は自身のことを指す。瘦梅と別号したように、自身と梅を  
「瘦」の字で表現することが多い。そして、詩人は屈原「漁父」の  
「顔色憔悴、形容枯槁」以来瘦せているというイメージで固定してい  
る。

88 椽菜花

椽菜花發將旬日 椽菜花 発て 將に旬日ならんとす  
猶在枝頭護老妍 猶ほ枝頭に在て 老妍を護す  
燕子無端來觸處 燕子 端無く 來り觸る處  
幾雙黃蝶落風前 幾双の黃蝶 風前に落つ

やまぶきの花は開いてからまさに十日も経とうとしている。  
まだ枝の先に付いていて、熟した美しさを保っている。  
燕が思いがけずやって来て触れる時に、  
幾組もの黄色い蝶(のような花)が風に落ちていく。

椽菜花 山吹。 燕子 燕のこと。

『詩聖堂詩話』十五話に結句の解説が載る。杜牧が鷲が舞い降り

るを描いて、「一樹梨花落晚風（一樹の梨花、晚風に落つ）」（鷺鷥）としたのを、意を反して「棟棠花」の詩を作ったとある。杜牧は花を鷺に、詩佛は逆に花を蝶に例えたので、「反して」と言ったのである。詩佛の詩作の方法論がかいま見える。

89 庭瀨森岡子璋宅讀唐伯虎集有感

（庭瀨の森岡子璋が宅に、『唐伯虎集』を読む。感有り。）

紅情綠思春如海 紅情綠思 春 海の如し

賦得花間月底風 賦し得たり 花間月底の風

最是關心題畫作 最是是れ 心に関かるは画に題する作

我行今在此詩中 我が行 今 此の詩の中に在り

艶麗な情緒を描いて、春の気分が海のように豊かだ。

見事に花や月の趣きを描いている。

最も気にかかるのは、絵に題した作品である。

自分の行動はまさにこの詩の中にあるのだ。

庭瀨 岡山市庭瀨。備中庭瀨藩二万石。森岡子璋 森岡松陰。

庭瀨藩家老。ここでの宅は庭瀨のそれが、江戸のそれは不明。

唐伯虎 唐寅。明代の画家。伯虎は字。一四七〇～一五二三。

唐伯虎集 唐寅の詩集。前半に「花月吟」の作が含まれ、律詩十

二首に一句ごとに、花と月の字を読み込んでいる。詩佛にはこの後

も『詩聖堂詩集初集』巻五に「做唐伯虎花月吟十首」がある。後半

には題畫六十六首が中心になっていて、風雅な生活を描いている。一例をあげると、「花月吟」は、「有花無月恨茫茫、有月無花恨轉長。花美似人臨月鏡、月明如水照花香。扶筇月下尋花步、携酒花前對月賞。如此好花如此月、莫將花月作尋常。」、「題畫」は「春驢仙客到詩家、為賞臨溪好杏花。山佃馱柴出換酒、隣翁陪坐自撈蝦」などである。

90 讀東坡先生集（『東坡先生集』を読む）

暴風卷海起波瀾 暴風 海を巻いて 波瀾を起す

救敵文章功倍韓 敵を救ふ文章 功 韓に倍す

莫取小詩容易議 小詩を取て容易に議する莫かれ

從來窘束大才難 從來 大才を窘束すること難し

公詩云文章曹植今堪笑却卷波瀾入小詩趙次公云今先生自笑窘束

大才而成小詩

公が詩に云ふ、

文章曹植今堪笑 文章 曹植 今 笑ふに堪へたり

却卷波瀾入小詩 却て波瀾を巻いて 小詩に入る

趙次公云ふ、今、先生、自ら笑ふ。大才を窘束して小詩を成す。

暴風が海を巻上げて波瀾を起す。

衰えた文学界を救ったその文章の功績は韓愈に倍する。詩という小さな世界だけで簡単に論議してはいけない。もともと偉大な才能をその中だけに収めるのは難しいのだから。

東坡先生の詩に言つには、

文章の曹植と言われたのも今はお笑い草だ。  
かえつて波瀾を小さな詩に入れている。

趙次公が言つには、「今、東坡先生は自ら笑つて、大きな才能を小さな詩に詰め込んだ」と。

東坡先生集 『東坡先生詩集』 北宋・蘇軾の詩文集。古文の唐宋八大家のひとりであり、日本でも愛読された。内容は類別で、注釈が付いている。 趙次公 『東坡先生詩集』の注の担当者の一人。「却巻波瀾」の句にここで引用されている注をつけている。詩佛はその注の表現を詩に取り入れたのである。

恐らくは、89詩と同じく庭瀨の森岡毛で読んだのであろう。

91 題東方朔圖（東方朔の図に題す）

金馬門中逃世者 金馬門中 世を逃るる者  
古今唯有此先生 古今 唯だ此の先生有り  
先生莫把詩人笑 先生 詩人を把て笑ふこと莫かれ  
吾亦藏身五字城 吾も亦 身を藏す 五字城

金馬門中という宮中で世から逃れた人といえば、古今、この先生だけであろう。

だから先生よ、詩人のことを笑わなくてもいい。私もまた、五言城という、詩の城に身を隠しているのだから。

東方朔 前漢の学者。武帝に仕え、金馬門侍中となる。 五字

城 例が見当たらない語だが、「五言城」（五言の佳作の意）という語があり、平字の「言」を仄字の「字」に置き換えたと思われる。『逸齋百絶』の佐羽淡齋の題辭の詩にも「五字城」の語が見える。

92 咏史

莫言不識蕭牆禍 言ふこと莫かれ 蕭牆の禍を識らざるを  
自古英雄事不同 古より英雄 事 同じからず  
萬里長城一成後 万里の長城 一たび成て後  
到今天下賴其功 今に到て 天下 其の功に賴る

蕭牆の憂という内部から起きる禍いを知らぬと言わないで欲しい。昔から、英雄は必ずしも同じではない。

（秦も内部から滅亡したが）万里の長城が一回完成すると、今に至るまで、天下でそれに頼っているではないか。

蕭牆禍 蕭牆の憂。内部や身近にある憂患。『論語』季子篇。英雄 主に秦の始皇帝を指すか。

93 得書(書を得たり)

客懷蕭索思歸切 客懷 蕭索として 帰を思ふこと切なり  
乍得家書喜忘餐 乍ち家書を得て 喜て餐することを忘る  
莫怪讀來遠淚下 恠しむこと莫かれ 読來 還て涙下ることを  
書中一一斷腸言 書中 一一 斷腸の言

旅人の氣持ちはもの寂しく、帰りたい氣持ちでいっぱいだ。  
突然、家からの手紙が来て、喜びのあまり食事も忘れた。  
怪しまないで欲しい、うれしいのに読むことに涙のこぼれるのを  
手紙の中のひとつひとつがはらわたがちぎれるような言葉なのだ。

94 秋夜

耿耿殘燈闇又明 耿耿たる殘燈 闇して又明なり  
臥聞風雨打窓聲 臥して聞く 風雨の窓を打つ声  
多情欲結相思夢 多情 相思の夢を結ばんと欲すれば  
其奈通宵眠不成 其れ通宵 眠り成らざるを奈せん

ちかちかと消え残った灯が、暗くなったと思つと明るくなったりす  
る。横になったまま、風雨が窓をたたき音を聞いている。  
情愛は深く、思慕の夢を見よつとするのだが、  
一晩中、眠れずに夢を見られないのをどうしたらよからう。

其奈 何奈などと同意という(『詩家推敲』)。

転句結句は和歌にある発想で、例えば『古今集』卷十一「夢のう  
ちにあひ見ん事を頼みつくらせる宵は寝んかたもなし」などと同  
想である。俗にも「忘れねばこそ思い出さず」などという。

95 贈畫梅人(梅を画する人に贈る。)

斷橋流水黄昏景 斷橋 流水 黄昏の景  
巽月精神幾度探 月の精神を巽て 幾度か探る  
寫得梅花休酷瘦 梅花を写し得て 酷はだ瘦すること休かれ  
詩人面目不堪慙 詩人の面目 慙に堪へず

壊れた橋に川の流れるある黄昏時の風景に、  
月の本質を求めて何度も探り歩く。  
梅花を描ききつて、はなはだ瘦せた姿にはしないで欲しい。  
瘦せた姿を誇る詩人の面目として、慙愧に堪えないから。

詩人の「瘦」を描いている。

96 即事

収麥畢功隨種稻 麥を収め功を畢へて 隨て稻を種え  
山泉幾道引潺湲 山泉 幾道 潺湲を引く  
桑田滄海眼前事 桑田滄海 眼前の事  
又見波瀾綠遍村 又 見る 波瀾 綠 村に遍きを

麦を収穫し終わって、ついで稻を植える。

山中の泉から、水の流れを引いてくる。

桑畑が大海原に変わるのには長い時の流れの変化のたとえだが、それが眼前に起こった。

今年もまた、緑の連なる波が、村の田圃いっぱいになるのを見る。

栗田滄海 滄桑之變。世の中の移り変わりのげいごのこと。この詩では、田圃に水を張ったのを桑畑が大海原に変わったのに例えた。

97 日光山瀑布

千尋直下自巖巖 千尋 直に巖巖より下る

流沫如烟衣欲霑 流沫 烟の如く 衣 霑はんと欲す

立久方知清到骨 立つこと久しくして方に知る 清 骨に到るを

此身来在水晶簾 此の身 来て 水晶簾に在り

千尋もの高さから真つ直ぐにこのつた険しい山から落ちてくる。滝の飛沫は霧のように衣を濡らす。

久しく立っている、まさに心のうちまで清らかになる。

この身は水晶の簾の中にいるようだ。

千尋 尋は長さの単位。一尋は八尺というが、ここは非常に高いことを言う。水晶簾 雨や氷柱などの譬喩によく用いられる。

ここは滝に転用した。

98 過碓井嶺(碓井嶺を過ぐ)

才過一嶺何如許 才に一嶺を過れば 何ぞ許の如き

不耐寒威逼骨奇 耐へず 寒威の骨に逼て奇なるに

屈指上毛逢雨日 指を屈すれば 上毛 雨に逢ふの日

信山云是雪来時 信山 云ふ是れ 雪の来る時

時五月朔淺間山新有雪(時、五月朔、淺間山、新に雪有り。)

たった一つの峰を越えようと、どうしてこのような違いがあるのか。寒さが骨に達して厳しいのに耐え難い。

指折り数えれば、上毛で雨に降られた日に、

信州の淺間山ではちよつと雪が降っていたと言つことだ。

五月一日に淺間山に初雪が降った。

過碓井嶺 碓氷峠を群馬側から長野側へ越える。

99 宿高崎山伯彭緑軒(高崎の山伯彭が緑軒に宿す。)

荷葉枯空菊亦殘 荷葉 枯れ空しくして 菊も亦た残す

繞軒無恙竹千竿 軒を繞り恙無し 竹 千竿

詩愁一夜眠不得 詩愁一夜 眠り得ず

臥聽雨聲敲作寒 臥して聴く 雨声の敲て寒を作すを

蓮の葉もすっかり枯れて、菊もまた衰えた。

軒をめくって、変わりが無いのは、千本もの竹だ。

詩の悩みで一晩眠れないまま、

横になって雨の(竹を)打つ音が寒さを増すようなのを聴いている。

山伯影 梶山惣右衛門。緑軒はその居室という。(一年譜稿)。

100 題長松寺(長松寺に題す)

重疊ちゆうじやう撫天毛信山 重疊ちゆうじやう 天を撫さす 毛信の山

曉昏送碧到禪關 曉昏 碧を送て 禪関に到る

西南一角尤奇處 西南一角 尤も奇なる處ところ

我便新從道裏還 我 便ち 新に道ちの裏より還る

幾重にも重なって、天を刺すような上毛や信州の山々。

明け方のまだ暗い頃に緑豊かなところを見送りつつ禪寺に着いた。

西南の一角の最も素晴らしい景色のところか、

私が、たつたいまこの中から帰ってきたところだ。

長松寺 高崎の赤坂山長松寺か。曹洞宗。

(跋文)

天民先生卜居集刊行の後有北征西游龍閑再游池頭之五集詩凡九八百餘首而七言律詩居半焉在邦等就集中抄出七言絶一百首以上粹或以非先生之所長難之余曰不然井中窺天雖不能知其大而可以見其高矣虎豹之一斑豈不足觀其文采哉寛政庚申冬

奥田在邦撰

河 三亥書

天民先生、『卜居集』刊行の後、『北征』、『西游』、『龍閑』、『再游』、『池頭』の五集有り。詩、凡そ八百余首にして七言律詩、居半なり。在邦等、集中に就て七言絶一百首を抄出し、以て上粹す。或るひと以て先生の長ずる所に非ずと、之を難す。余、曰ふ、然らず。井中、天を窺ふ、其の大なるを知る能はずと雖ども、而して、以て其の高きを見るべし。虎豹の一斑、豈に其の文采を觀るに足らずや。寛政庚申冬

奥田在邦撰

河 三亥書

天民先生には、『卜居集』刊行の後、『北征』、『西游』、『龍閑』、『再游』、『池頭』の五集がある。詩、およそ八百余首で、七言律詩が大半である。在邦らは、その集中から七言絶句百首を抜き出して、出版することにした。ある人が、「(七言絶句は)先生の得意とする詩体ではない」と、このことを批難した。そこで私は、「そうではない、井戸の中から空を見ると、その大きさをすることはできないが、その高さを知ることが出来る。虎や豹の皮の模様の一部を見るだけであっても、どうしてその美しさを想像するのに十分ではないことがあるうか」と答えた。寛政十二年冬

先生之所長 『五山堂詩話』 卷一にも「詩佛は七律に長じ、七絶に短なり」の語が見え、第一詩集『卜居集』も律詩が中心である。

詩集名を一巻ごとに『北征』『西游』などと名づけるのは、楊誠齋の『江湖』『荆溪』などと同じ方法である。

注1 「大窪詩仏年譜稿」『江戸詩歌論』揖斐高著。以下の引用は「年譜稿」と記す。

注2 岩波文庫『詩本草』揖斐高校注。